トレセン学園の教師でウマ娘？

とあるP

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

子供頃から周りの人達とは違う彼は松原凪。彼にはある能力があった。それはウマ娘の母親から生まれた為、ウマ娘の能力があった。

しかし、歳を重ねるにつれてその力は日に日に目立って行くのであった。

そんな彼がトレセン学園の教師であり、トレーナーでもある日常。

そこには、

・葦毛（オグリキャップ）の怪物

・不屈（キングヘイロー）のエリート

・百年（ゴールド）に一人（シチー）の美少女

・青天の奇術師（セイウンスカイ）
・天性のスプリンター（サクラバクシンオー）
のウマ娘達がいるのであった。
※主人公は男版ウマ娘です。なお、独自設定マシマシなのでそこら辺はご了承ください m（＿＿）m

目次

ｅｐｉｓｏｄｅ１　俺はウマ娘　――　１
ｅｐｉｓｏｄｅ２　凪先生の初授業と初日で正体バレる!?　――　６
ｅｐｉｓｏｄｅ３　凪先生の真夜中のトレーニング　――　17
ｅｐｉｓｏｄｅ４　凪先生の日常　24

ｅｐｉｓｏｄｅ１ 俺はウマ娘

ウマ娘

異世界（現実世界）の競走馬の名前と魂を受け継いで生まれてきた少女たち。外見は腰付近から馬のような尻尾が生え、馬のような耳が頭頂部付近にある。超人的な走力と３０００ｍ以上の距離を走りきる

スタミナを有するが、耳と尻尾以外は普通の女の子と同じ外見を持つ。

そう、普通は女の子なのだ。だがここに居る彼はそんなウマ娘と同じくらいの力を持っている。彼の名は松原凪（まつばらなぎ）。凪は生まれた時からウマ娘と同じ力を有していた。父親は普通の一般人。母親がウマ娘だった為母親の血を色濃く受け継いだ。その為子供頃は足が速かった。

中学になるとその力が顕著に現れた。クラスの中では凪に追いつけない人はウマ娘くらいだった。身体測定でもダントツのトップ。リレーのアンカーを任せれば、誰にも追いつけないくらいだった。

しかし、それはいじめの対象としては十分だった。同年代の子達からは嫉妬やアイツ

は違う生き物だと思われていた。

高校生になると、両親達から「貴方はウマ娘と同じ力があるのよ」と言われたが、さほど驚かなかった。何故なら、既に中学生の時にその力を目の当たりにしていた。

だから、凪は隠れて生きていこうと誓った。幸いにも中学生時代の子達とは違う県外の高校を受験したため、昼間は普通の人として、夜は学校の校庭を使って日々特訓をしていた。

そんな凪も高校を卒業し、就職活動をしていた時だった。トレセン学園でトレーナーの募集をしていたのだ。

トレセン学園正式名称は「日本ウマ娘トレーニングセンター学園中等部高等部」。全国のウマ娘トレーニング施設の中でも最新鋭かつ最大規模の施設であり中高一貫の教育機関でもある。

文武両道を掲げており、座学や定期学力考査も実施される。また定期学力考査で成績の悪いウマ娘には追試と補習も存在する。学生食堂・図書室・室内プール（飛び込み台付き）・購買部などの設備も充実している。

そんな所で凪は思った。（これなら堂々と走れる！今までびくびくしながら走っていた、自分を無くしたい！）と…

早速両親に相談した。両親は「貴方の決めた道なら応援するわよ」とトレーナーの件

を承諾してくれた。但し、トレセン学園にはトレーナーだけではなく、「教師」として通いなさいと…

凪は学力でも常に上位に食い込む位の持ち主だった。両親からの提案に凪は渋々了承し、先ずは教師としてトレセン学園に入ることにした。

そして、何とか教員採用試験に合格し、凪はトレセン学園に晴れて入ることが出来た。この時21歳。

「相変わらずでかいね～トレセン学園って」

上下をカジュアルスーツに身を包み、刈り上げツーブロック無造作ショートで整えた凪は早速理事長室に向かって行くのであった。

そして、重厚なドアに「理事長室」と書かれた所で深呼吸してドアを3回ノックした。

『は～い』

「失礼します」

入って見ると、緑色のC・A（キャビンアテンダント）に似た姿のスーツの女性と、「理事長」と書かれた扇子と腰まであるオレンジ色の髪に一本だけ白っぽい髪と帽子を被り、頭に猫を載せている女の子がいた。如何やらこの子が理事長らしい。

「歓迎ッ!!ようこそ、我がトレセン学園へ！私はトレセン学園理事長秋川やよいだ！」

「そして、私がトレセン学園の理事長秘書。そして、トレーナー、生徒達をサポートして

います駿川たづなと言います」
「松原凪です。よろしくお願いします」
「うむ!!早速で悪いが全校集会を行う!そこで、君の紹介を行う」
「その時の挨拶をお願いしますね」
「わかりました」
　そう言って、理事長とたづなさんの後について行くと、ざっと２００人くらいは入れそうな施設に案内された。そこには、多くのウマ娘達がいるのであった。
　そんな中を理事長、たづなさんと一緒に登壇するのであった。
『傾聴ッ!!皆に知らせたい事がある!今日トレセン学園に来た新たに先生兼トレーナーを紹介する!心して聞くように!!では、よろしく頼む!』
『え～ご紹介預かりました松原凪と申します。教師としてここに来ました。科目は社会と理科になります。教師としてもトレーナーとしても新人なので、気軽に話しかけてくれたら嬉しいです。よろしくお願いします』
　そう言って、お辞儀をするとまばらではあるが、拍手が起こった。凪はまぁこれくらいだろうなぁと思っていた。
　そして、降壇すると１人のウマ娘が凪に声をかけてきた。
「初めまして松原トレーナー。私はシンボリルドルフ。この学園で生徒会長を勤めてい

る」
「松原です。よろしくお願いしますね」
「そう固くならなくてもいい。お互い粉骨砕身の精神でより良い学園生活を使用じゃないか」
　そう言って、シンボリルドルフは握手をしてきたので、凪も同じ様に握手をするのであった。返答する形で凪も握手をするのであった。
「なら、こちらこそよろしく頼む」
「うむ」
　そう言って、シンボリルドルフは去って行くのであった。全校集会での紹介が終わり理事長室に戻ると、早速秋川理事長とたづなさんから授業に出る様に言われるのであった。
「では!!早速で悪いが授業をお願いする!!」
「職員室に行けば、松原さんの机に担当するクラス名簿と、教材がありますので」
「わかりました」
　理事長室から職員室に行くと、凪の机に彼が大学時代に使用していた教科書や教材などがあった。そして、授業を行うためクラス名簿と教材を持って向かうのであった。

ｅｐｉｓｏｄｅ２　凪先生の初授業と初日で正体バレる!?

凪が向かったのは中等部の教室であった。クラス名簿を片手にドアを開けると、皆の視線が一斉に凪に向けられた。

少しだけ引きそうになったが、初授業であるため我慢して教壇に立つのであった。

「えっと…こんにちは。朝紹介した松原凪です。よろしくお願いしますね」

『…』

「えっと…それじゃあ自己紹介をお願いしようかな?」

そう言って、窓際の子達から順に自己紹介をして行くのであった。

「オウ!俺はウオッカだ!よろしくな!」

「ハーイ!カレンチャンだよ～よろしくね～」

「ええ、私がキングヘイローよ。よく覚えておきなさい」

「はい!スペシャルウィークです!」

「ダイワスカーレットと言います」

「テイエムオペラオーとは、ボクの事だよ!」

「ワガハイが無敗の帝王。トウカイテイオーなのだ！」
「おいっす～ナイスネイチャで～す！」
「ハルウララでーす！」
「マヤノトップガンだよー！アイ・コピー☆」
「メジロマックイーンと言います。以後お見知りおきを」
「ｚｚｚ…ｚｚｚ」
「ちょっと！セイウンスカイさん！あなたの番ですわよ」
「う～んもうちょっと寝かせて～」
「もう…先生、彼女はセイウンスカイさんと言います」
「なるほどね…そして君は？」
「は、はい！あ、あの…め、メイショウドトウと言います…」
「エルコンドルパサー！ヨロシクお願いシマース！」
「グラスワンダーと申します」
　こうして１５人の自己紹介が終わった。
「それじゃあ、僕の事は朝全校集会で話した通り、松原凪と言います。これからもよろしくお願いしますね」
『はーい』

「今日はこれくらいにして、あとは自習にしようか」
「先生、質問があります」
　凪がこの後の時間を自習にしようとしたら、1人のウマ娘が質問してきた。その子はツインテールにし、頭にティアラを被っている子だった。
「えっと…何かなダイワスカーレットさん?」
「はい。先生は教師であると同時に、確かトレーナーであったはずです。目星のウマ娘とかいるのでしょうか?」
「ああ、その事ね…そうだね。まだ、君たちの練習風景を見ていないから誰にするとかは、決めていないかな」
「そうでしたか…余計な事を聞いて申し訳ございませんでした」
「大丈夫だよ」
　そんな事もあり授業は終わった。次の授業の準備をする為、一度職員室に帰ると、次の教室のウマ娘の名簿が置いてあった。それを受け取り、次の教室に向かうのでった。
「次はここか…」
　先程と同じ中等部の教室だが、ここに居るメンバーも違う。それでも凪は教室に入って行くのであった。
「失礼しまーす!」

先程の事があったので、ある程度耐性が付いていた。
「えっと…こんにちは。朝紹介した松原凪です。よろしくお願いしますね」
『よろしくお願いします～』
「それじゃあ、皆さんの事を教えてほしいので、自己紹介をお願いしますね」
「は、は、はい、い、い！あ、ああアグネスデジタルって言います！あ～あの王子様に会えるなんて…」
「イクノディクタスです」
「キタサンブラックです！」
「サトノダイヤモンドと申します」
「スイープトウショウです」
「に、ニシノフラワーと言います」
「ビコーペガサスだ！」
「マーベラスサンデーです！マ～ベラス！」
「マチカネタンホイザって言います！えい、えい、むん！」
「カワカミプリンセスですわ！」
「ヒシアケボノです！ボーノ！」
「ユキノビジンいいます～」

「ツインターボ！」
「…ゼンノロブロイです」
「トーゼンジョーダンでいいま～す☆」
「シンコウインディなのだ！」
「アドマイヤベガです」
「バンブーメモリーっす！」
「ナカヤマフェスタだ…よろしくな先生」
皆からの自己紹介を聞いて、凪はメモを取っていた。どの子がどんな感じなのかを覚えるためである。そして、後の時間は自習にしてた。
お昼休み。ウマ娘達で賑わうカフェテリア。ウマ娘に合わせて食事量が多く、皿に載ったご飯が多く顔が見えない程度だった。
そんな中、凪はどれを食べようか迷っていると、後ろから来た人物達に呼び止められた。
「うーん…どれにしようかな？」
「お、お前が新入りか？」
「はい？」
「よ！俺は沖野って言うんだ。あっちのテーブルでトレーナー同士一緒に食べないか

？」
「いいんですか？わかりました」
そう言って、おばちゃんに食券を渡して、料理を受け取る。今日は日替わり定食にした。どうやら沖野も同じのにしていた。
そして、おばちゃんから日替わり定食を受け取り５人が座っているテーブルに向かった。
「よう！期待の新人トレーナー連れてきたぜ」
「あら、貴方今朝の全校集会で紹介された人ね」
「そうでしたね」
「確か、教師でトレーナーさんですか。噂になっていましたね」
「…ふん。どんな奴だど思ったが…」
「まぁまぁ、いいじゃないか。それよりも食べようぜ」
そう言って、７人は食べ始めた。そして、食べ終わると自己紹介を始めた。
「なら、俺からな。俺は沖野って言うんだ！チーム「スピカ」を担当している」
「次は私ね。東条はなよ。チーム「リギル」を担当しているわ」
「僕ですね。南坂です。チーム「カノープス」を担当しています」
「私ですね。初めまして、桐生院　葵です。チームは持っていませんが「ハッピー・ミー

ク」を担当しています」
「…黒沼だ。「ミホノブルボン」を担当している」
「松原凪です。昨日赴任して来ましたばかりです。よろしくお願いします」
「松原はもう担当する子（ウマ娘）は決めたのか？」
「いえ、まだ、分からないですね…」
「なら、今日の放課後学園のターフで練習している子や、来週末ある選抜レースで決めればいいわ」
「因みに、俺の「スピカ」は「スペシャルウィーク」、「サイレススズカ」、「ウオッカ」、「ダイワスカーレット」、「メジロマックイーン」、「トウカイテイオー」、「ゴールドシップ」だな」
「私のチームには「シンボリルドルフ」、「マルゼンスキー」、「タイキシャトル」、「エアグルーヴ」、「ナリタブライアン」、「フジキセキ」、「ヒシアマゾン」、「テイエムオペラオー」、「グラスワンダー」、「エルコンドルパサー」と最強を目指しているわよ」
「僕の「カノープス」は「ツインターボ」、「イクノディクタス」、「ナイスネイチャ」、「マチカネタンホイザ」ですね。未だ勝利はないですけど、これから頑張りますよ」
「私は「ハッピー・ミーク」だけですね」
「…オレは「ミホノブルボン」を最強のウマ娘にする為に1人だけだ」

「皆さん凄いですね。僕も負けませんよ」
「おう! いつでも待ってるぜ」

カフェテリアで別れた7人は、放課後にグラウンドで会う約束をした。そして、放課後…

「ここがトレセン学園のグラウンドか…」
一足先に来た凪はトレセン学園のジャージ姿になり、ターフの状態ヲ確かめるのであった。そこに現れたのは、長い髪にカールを巻いているウマ娘に水色の髪をショートカットにしたウマ娘が現れた。
「ちょっと、セイウンスカイさん! 今日と言う今日は練習に参加して貰いますわよ!」
「そんな事言わないでよ~キングの邪魔はしないからさぁ」
それは、教室で見たキングヘイローとセイウンスカイの2人だった。彼女達はお互いに準備運動をして、ターフ上で打合せをしていた。
「それでは、２４００ｍを3本。１８００ｍを2本。１２００ｍを1本に致しましょう」
「それでいいけどさぁ。キング体力持つの?」
「だ、大丈夫ですわ! 私はキングヘイロー! 王者ですもの。オーホッホッホ!」
そんな2人のやり取りを遠目で見ていた凪は何かあったら困ると思い、準備運動をし

ていた。そして、２人は２４００ｍの所からスタートした。
前半はセイウンスカイが得意の逃げでぐんぐんと差を広げていく。対するキングヘイローは付いて行くので精一杯であった。そして、第４コーナを入った辺りからキングヘイローが差しにかかろうとしたその瞬間、あまりにも前傾姿勢で転倒しそうになった。
「つきゃ！」
「っ！マズイ！」
凪は不思議と身体が動いた事に感謝した。それと、自分がウマ娘の血を受け継いだ事にも感謝した。凪は一直線にキングヘイローに向かい受け止める覚悟していたが、上手く態勢を立て直したキングヘイローはセイウンスカイとのレースに戻った。
周りの目もお構いなしに凪はキングヘイローと並走していた。
「キングヘイロー！」
「あ、貴方！どうしてここに！」
「それよりもあごを上げろ。前を向いてセイウンスカイの背中を見るんだ！」
「い、言われなくたって…！」
差し切り態勢を維持したまま、ゴール盤を駆け抜けたが、一歩及ばずセイウンスカイを差し切れなかった。

互いに肩で息している中、キングヘイローは凪を見ていた。彼は汗1つ垂れていない。むしろ涼しい顔をしている。
「ハァハァ…キング…早いねぇ～」
「セイウンスカイさんも…けど問題は…」
「…フゥー。まだまだこれからだな」
凪が感触を確かめている間にキングヘイローは凪にある疑問をぶつけていく。それは、どうしてウマ娘と同じスピードを出せるのかだ。
「貴方どういうことか説明してくださる?」
「…えっと、何のことかな?」
「とぼけないでくださいまし!あの走り。私たちウマ娘に追いつくなど並みの人には、出来ませんよ」
「そうだよね～。ましてやノーモンションでキングに追いつくなんて、有り得ないよね～」
「…あ～あの時は無我夢中で走っていたからね」
「けどそれだけで説明は出来ないと思うけどね～」
「…」
「さあ!答えてくださいまし!」

「…はぁ～分かったよ。僕の秘密を知りたければ、今夜もう一度ターフにおいで。そこで教えてあげるよ」

そう言って、凪はターフから出て行くのであった。その話しを聞いていたのは、キングヘイロー、セイウンスカイともう1人、百年に一人の美少女が聞いていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ３　凪先生の真夜中のトレーニング

その日の夜。学園のターフが照明で照らされている中キングヘイローとセイウンスカイが居た。２人ともジャージ姿で蹄鉄を履いており、凪の到着を待っていた。
「それにしても、遅いですわね…」
「まぁまぁ気長に待とうよ。怒ると小皺が増えるよ。キング」
「小皺は余計ですわ！」
そう言って、２人で言い争っているとジャージ姿で現れた凪が出てきた。その足には、ウマ娘がレース等で履く用の蹄鉄が付けられていた。その他にも…
「お待たせしました」
「せ、先生！その格好は…」
「ほぉ～セイちゃん、これは初めて見たよ」
そう、凪のお尻には彼女達同様尻尾が生えているのであった。耳は普通の人の耳であったが、それ以外はウマ娘同様の体付きになっていた。
「どうして、そんな格好になっているのですか？」
「僕の祖母がウマ娘でしてね。その祖母から血を濃く受け継いだ形で、ウマ娘になれた

んですよ」
「失礼ですが、お婆様のお名前を伺ってもいいですか？」
「えっと…確か『ハイセイコー』だった気がします」
「ええ！あの伝説のウマ娘ですってー！」
『ハイセイコー』彼女の名前を知らないウマ娘はいないくらいの、伝説のウマ娘である。地方出身の彼女は伝説級の強さを持っていた。最終戦績２２戦１３勝。今でも語り継がれる伝説級の彼女の孫が今目の前にいる。
　そう思った、キングヘイローとセイウンスカイは身震いがして来た。
「けど、祖母は祖母。僕は僕です。さて、時間がありませんので、早めにアップをしましょう」
　凪達が使えるのは2時間。それを超えると、寮長であるフジキセキから大目玉を喰らってしまうので、早めにする必要があった。そして、アップを済ませた3人は２００ｍのスタート地点にいた。
「今日は中・長距離のレースを想定した走りにしましょう。僕は『追い込み』で、２人の後ろから走ります。２人は得意な脚質で大丈夫ですよ」
「へぇ～随分と自信があるんですね」
「フン！このキングに勝てるわけありませんわ」

そう言って、３人はスタートゲートに収まった。そして、ゲートが開いてスタートした。

セイウンスカイが『逃げ』、キングヘイローが『差し』、凪は『追い込み』で走っておりセイウンスカイが快調に飛ばしている。

第一コーナーを回って第二コーナーを回り直線に入った。依然セイウンスカイが一人旅している状態だった。

（へっへ～今回もキングには悪いけど勝たせて貰うよ～）

（セイウンスカイさん…順調に飛ばしていますわね。けど、わたくしも負けませんわ！）

（なるほどね…セイウンスカイは『逃げ』、キングヘイローは『差し』だな。それなら仕掛けるのは第三コーナーだな）

縦列に並んだ３人は第三コーナーに入った所で、凪が仕掛けた。

（良しここだ！）

『え!?』

凪はここで、一気に前に出た。これにより、動揺した２人は一瞬掛かりスピードが落ちた。そこを凪は見逃さなかった。

そこからどんどん差が広がり、１バ身、２バ身と広がって行った。最終コーナーに入る時点で順位は、凪、セイウンスカイ、キングヘイローとなっていた。凪はキングヘイ

ローの末脚を警戒しながら走っていた。
（さて、あと２００ｍ。ここで、キングヘイローの末脚が来るかな？）
（は、速すぎますわ！）
（うぁ～先生速すぎー！勝てないよ！）
　そして、凪が警戒していたキングヘイローの末脚が発動される事無く、凪が１着でゴール板を通過した。
「フーっ…今回も上手く行ったな」
「ハァ、ハァ…先生速すぎだよ～」
「ほ、本当…ですわ…どうして、そんなに…強いのですの？」
「僕は、今まであらゆる脚質を研究してきたから何処で勝負をかければいいのかが、分かるからね」
「へぇ～因みに、先生は何処で特訓したんですか？」
「えっと…主に海外が多かったかな？あとは地方の野良競技場で、レースとかしてかな？」
「か、海外経験とかあるのですか!?」
「ああ、フランスやイギリス、時にはアメリカまで行ったことがあるな。まぁ～あっち（海外）のウマ娘達も目を見張る物があったな」

そんな話しをしている間に、３人とも息が整っていつでも走れる準備になった。そして、２０００ｍのスタート位置に戻ろうとした時、１人のウマ娘から声がかかった。彼女は金髪をなびかせながら、３人の元に走って来た。

「ねぇ、その特訓、アタシも混ぜてよ」

「君は？」

「アタシはゴールドシチー。昼間の先生の動きが気になって付いてきたの」

「ゴールドシチーさんだっけ？寮長に許可を取ってきたのかな？」

「取ってきてないわ…けど、先生の走りを見て居ても立っても居られなかったのよ！」

「…わかったよ。なら、終わったあと寮長のとこにいこうか」

「はい」

そして、ゴールドシチーを交えた４人でスタートダッシュや中長距離のトレーニングを行った。そして、ゴールドシチーの栗東寮長である、ヒシアマゾンにこっぴどく怒られた。

次の日。理事長室に呼ばれた凪は少しだけ緊張気味だった。何せ、夜中にもかかわらず３人の生徒達と秘密のトレーニングを行っていたのだ。一応許可を貰っていたから大丈夫だと思っていたが、理事長室に近づくにつれて、胃が痛くなってくる。

そして、理事長室に着いた凪は重たいドアを開いた。
「失礼します。松原凪来ました」
「歓迎!!忙しいところよく来てくれた!先ずは座りたまえ」
「そう言って、いるのでどうぞ」
「失礼します」
たづなさんと理事長から促されて凪は座った。そして、一枚の写真を出された。そこには、ゴールドシチーよりもプラチナブロンドで白・青・赤の軍服姿に身をつつみ。肩から何処かの王様の様なファーをなびかせている。
「彼女の名前は『ブロワイエ』。欧州出身の彼女は以前来日した際に、ジャパンカップでスペシャルウィークさんとレースをしました」
「それで、そのブロワイエと僕がここに呼ばれた理由がわからないんですけど…」
「実は、来週末からブロワイエさんが来日する際に案内役を務めて欲しいんですよ」
「…どうしてですか?」
「依頼!これは、向こう側からも依頼された内容なのだ!」
「ブロワイエさんが?」
「うむ!是非とも受けて欲しい!」
「私からもお願いします」

「…わかりました。それに、古い友人に会うのも楽しみですからね」
『古い友人？』
そこの言葉の返答を聞く前に、凪は理事長室から出て行くのであった。

真夜中のフランス。
ブロワイエは自室でトレセン学園来日ＯＫの返事を受けて、一層トレーニングに熱が入った。
「久しぶりに会えるな。ナギ…いえ、師匠」

ｅｐｉｓｏｄｅ４　凪先生の日常

　ブロワイエの来日が決定した次の日、凪は街の商店街に来ていた。つい先日引っ越してきたばかりなので、生活用品を買い足す必要がある。
「えっと…肉屋はあそこにあって、魚屋はここか…」
　今日は土曜日。休日ともあって、街は大いに賑わっていた。そこに1人のウマ娘が現れた。その子はピンク色の髪の毛にショートカット。赤い目を元気いっぱいに開けて、八百屋さんの前で大きな声を出していた。
「さぁさぁ！人参が安いよ～！甘くて美味しい人参だよ～！」
「いいぞ！ウララちゃん！」
「頑張って～！」
　よく見ると昨日自己紹介したハルウララが元気よく声を出していた。それにつられて、凪は八百屋さんの前までやって来た。
「こんにちは。ハルウララさん」
「あ、センセーだ！こんにちは！」
「お手伝いですか？」

「うん！今日はね、八百屋さんのおじさんから「お手伝いしたら、人参い～ぱいあげる」って言ったんだ！だから、頑張るね！」
「そうですか。なら人参を３本くださいな」
「はい！ありがとうござい！」
　そう言ってハルウララから人参３本を貰って会計をするのであった。
「すまないね。何だかせがんだ様になったみたいで…」
「いえいえ、どうせ今日の夕食を何にするか決めかねていたので…それに、僕は人参好きなので」
「お、そりゃあいいね。なら、１本オマケしてやるよ」
「ありがとうございます」
　八百屋さんで人参を買った凪はある物を買うために、商店街の薬局に立ち寄った。
「いらっしゃいませ」
「すみません。湿布やテーピングテープってありますか？」
「ありますかけど、生憎ウマ娘用のしか置いてないですよ」
「それで、大丈夫ですよ」
　薬局で色々揃えた凪は昼飯を取るため商店街をぶらぶらしていた。ふと見ると路地裏で男４～５人で１人のウマ娘を囲んでいる姿があった。

　その子は下手なナンパにうんざりしているようだ。
「なぁ～お嬢さん～俺達とイイ事しようぜ」
「そうそう、気持ちいいことだからさぁ」
「退屈させないぜ」
「お生憎さま。アタシは人を待っているの。用がないならさっさと帰って」
「何だとこのアマ！」
「ウマ娘だからっていい気になりやがって！」
「構わねぇ！やっちまえ！」
　それを見ていた凪はマズイと思って慌てて男達の間に入った。
「スト――プ！」
「誰だアンタ？」
「先生…」
「探しましたよ、ゴールドシチーさん。さぁ学園に帰りますよ」
　そこに居たのは、昨日の深夜にやったトレーニングに参加していた、金髪がよく似合うゴールドシチーだった。そして、凪はゴールドシチーを連れ出しそうとしたが、男達に再度囲まれてしまった。
「オイオイ兄ちゃん。あとから来て美味しい所だけ持っていくのは無しだぜ」

「それによう～こんな優男よりも俺達の方がずっと楽しませてやるからよ」
どんどん男達が近づいていく中で、凪はシチーを庇う様にした。そして、１人の男が鉄パイプを手にして、凪に襲い掛かって来た。
「どけよ！優男！」
「先生――！」
男は凪の頭めがけて鉄パイプを落としてきた。その事に怖くなったシチーは目をつぶってしまった。
ガキッン！
鉄パイプ特有の鈍い音が響き渡った。恐る恐るシチーが目を開けるとそこには、鉄パイプを片手で持っている凪の姿があった。
「ダメじゃないですか～そんな事をしたら。怪我でもしたら大変ですよ」
「くっ！あ、アレ？」
「おい、どうした!?」
「ぬ、抜けねぇ！」
凪は男が殴ってきた鉄パイプを持ったまま離そうとはしなかった。そして、その鉄パイプに力を入れると、グシャ！と言う音が聞こえた。
見てみると、凪が持っていた鉄パイプの部分が潰れていた。

「ひぇ！何だよこの男！」
「ば、バケモノか！」
「落ち着け！囲んで叩き込めばいい！早くしろ！」
　残りの男達が他の鉄パイプを取ろうとしたが、その間にシチーの手を取って男達の隙間を抜けた。
「逃げるよ！」
「え、っきゃ！」
「あ、待ちやがれ！」
「逃がすんじゃあねぇぞ！」
　シチーと凪は男達から逃げるため、全速力で商店街を駆け回った。その時シチーの脚がもつれて倒れそうになったので、すかさず凪が受け止めた。
　しかし、男達がすぐ目の前まで来たので、シチーの両足を持ち背中に手を入れて抱き上げた。いわゆるお姫様抱っこ状態である。
「ちょっと先生!?」
「喋らないでください！このまま行きます！」
　そう言って、凪はシチーを抱っこしたままトレセン学園へ急いだ。それを見た商店街の人達は『ウマ娘をお姫様抱っこした先生』と言う異名が付いたのは別の話…

トレセン学園の門をくぐった凪とシチーは安堵の表情を浮かべていたが、シチーは頬を紅くしていた。ふと凪は今の状況を思った。
それを見た凪は急いでシチーを立たせるのだった。
「ふぅ…何とか巻いたみたいですね」
「／／／」
「あれ？ゴールドシチーさん？大丈夫ですか？」
「あのさ先生…早く降ろして欲しいんだけど／／／」
「あれ？…あー！すみませんでした」
「だ、大丈夫だし／／／」
「怪我とかありませんか？」
「うん。転がっていないから大丈夫だよ。ありがとうね先生」
「良かったです。けど、あの人達は？それに、待ち合わせした人とかいないのでしたか？」

「あ～平気だよ。あれ？だし」
「へ？」
「だってあーでも言わないと、アイツら引かないからさぁ～」
　それもそうだったと思う凪であった。
「それよりも先生はどうして、商店街(あんな場所)に居たの？」
「それはですね。最近引っ越してきたばかりだったので、色々調達して来たんですよ」
　そこには、八百屋で買ってきた人参と薬局で買って来た湿布とテーピングテープがあった。
「人参は今夜の夕食を作る為に買ってきたんですよ。湿布やテーピングテープは皆さんの練習用です」
「ふ～ん…ねぇ先生。助けたお礼に、夕食作ってあげようか？」
「…冗談は止めてくださいよ。もし他の先生達に見つかって、怒られるのは僕なんですよ」
「チェ！面白くない」
「冗談でもいい冗談と悪い冗談がありますよ」
「…冗談じゃないのに」
「はい？」

「何でもないよ♪それじゃあまたね」
そう言って、シチーは寮の自室に帰っていくのであった。それを見送った凪は自室で買ってきた人参で料理をするのであった。